

〈報告〉

順天堂大学スポーツ健康学部生の飲酒意識調査(1):
飲酒状況と飲酒の強要

高清 祐加・河合 祥雄*

Attitudes of college students towards alcohol consumption at School of
Health and Sports Science, Juntendo University (1)

Yuka TAKASE and Sachio KAWAI*

1. はじめに

多くのスポーツジムでは飲酒中・後の利用が禁止されており, 競技種目によっては, アルコールはドーピング対象薬物として禁止されている. 本学部ではスポーツをしている学生が大多数を占める. 運動競技に対しアルコールは有利には作用しないので, 日常的な飲酒を控えている競技者も多いが, 「打ち上げ」などで飲酒を強要され, 飲酒習慣を獲得してしまうものもあると考えられる. 一般的に「体育会」における先輩後輩の上下関係のあり方と「飲み会」における強制飲酒を許容する風土には極めて近い基盤がありうるが, 生活環境の差や, 競技のために飲酒を控えている学生などの生活習慣によって飲酒への意識には違いがあるのではないかと考える. 本学学生の飲酒状況やアルコールに対する近年の意識調査は少ない. アルコールハラスメント防止キャンペーンを有用なものにするためにも, 体育系大学生が飲酒に関してどのような意識をもち, どのような自己管理をしているかの実態調査は不可欠である. 体育系大学生が持つ問題意識, 自己管理の内容を明らかにすることは, 飲酒による体調不良やパ

フォーマンス低下を軽減するための指標となり得る.

「飲酒に関する大学生の意識調査」(眞崎睦子: 北大生101人と飲酒: 「飲酒に関する大学生の意識調査」¹⁾のアンケート調査用紙を運動競技者に使用できるように改変した調査用紙を用い, 本学学生の飲酒意識調査を行い, 飲酒実態の把握と問題点及び改善点を見出すことを目的とした.

2. 対象とアンケート配布・回収方法

順天堂大学スポーツ健康科学部1年生は啓心寮に居住者を対象として, 2009年11月19日に, 2年生は「スポーツ医学(内科)」の授業を受講している168人のうち2009年11月12日に出席した学生を, 3, 4年生は各所属ゼミナール学生に対して, 2009年11月10日にアンケートを配布し, 1年生は啓心寮にて, 2年生は授業時間内に, 3, 4年生は健康管理室にてアンケートを回収した.

3. 方 法

意識調査は無記名アンケートとして, 「飲酒に関する大学生の意識調査」(眞崎睦子: 北大生101人と飲酒: 「飲酒に関する大学生の意識調査」(2007年)北海道大学大学院教育学研究院紀要103巻掲載のアンケート調査用紙を改変した)を用い, 飲酒経験, 飲酒強要・被強要, 飲酒教育, アルコール体質, 運

* 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ医学研究室
Research Laboratory of Sports Medicine, School of
Health and Sports Science, Juntendo University.

動頻度などを調査した。追加した項目は、現在の競技に対する取り組み方(真剣度: Visual analog scaleで0-10までに数値化)、週あたりの練習日(日)、一日あたりの練習時間(時間)、運動(練習や実技授業)や、試合の前日にアルコールを控えかどうかの項目であり、削除した項目はAA(Alcoholics Anonymous)、Al-Anon、断酒会に関する項目(Q17-Q22)である。

アンケートの冒頭に、(1)調査結果を、授業の中での教材もしくは今後の学生指導の資料として学内外で利用すること、(2)無記名アンケートであり個人のプライバシーの侵害等、記入したことによる不利益は一切ないこと、(3)意識調査中に肉体的・精神的苦痛を訴える場合、調査用紙の記載を途中で中断しても何らかの精神的・身体的不利益を被るものではないこと、を明記した上で調査を行った。

本調査は、「体育系大学生の飲酒意識調査および主観的アルコール濃度判断に関する検討」(順大ス倫第21-5号)(研究代表者:河合祥雄)、および「体育系大学生・院生の飲酒意識調査」(順大ス倫第21-12号)(研究代表者:河合祥雄)として、研究倫理等審査を経ている。

配布枚数は啓心寮の学生数である331枚、授業に出席した2年生に対して136枚、3,4年生のゼミナール所属人数である663枚の計1130枚であった。アンケートの回収は2009年11月30日で締め切り、それまでに回収できた713枚について検討を加えた。

4. 結 果

1年生280名、2年生129名、3年生162名、4年生142名の計713名からアンケートが回収された。そのうち、有効回答と考えられた1年生227枚(81%)、2年生117枚(91%)、3年生131枚(81%)、4年生127枚(89%)の計602枚(86%)、602名分を調査の対象とした。無効回答数は、1年生53枚(19%)、2年生12枚(9%)、3年生31枚(19%)、4年生15枚(11%)、計101枚(14%)であった。

以下に対象者背景(表1-4)、飲酒状況(表5-11)、飲酒の強要(表12-17、図1-3)を示す。

表1 対象学年

Q1. 「あなたの学年は？」に対する回答(%は学年内の総和に対する割合を示す)

学 年	1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
人 数	227	117	131	127
%	69%	35%	40%	38%

表2 対象年齢とその割合

Q2. 「年齢を()内にご記入ください」に対する回答

年 齢	18	19	20	21	22	23
人 数	44	168	149	122	100	19
%	7%	28%	25%	20%	17%	3%

表3 対象の性別

Q3. 「あなたの性別は？」に対する回答

性 別	男 性	女 性
人 数	381	221
%	63%	37%

表4 生活環境

Q6. 「あなたの生活環境を選んでください」に対する回答

	実 家	一人暮らし	寮	その他
人 数	61	239	296	6
%	10%	40%	49%	1%

4-1 対象者背景

表1(対象学年)で示すように、寮に配布した1年生の回収率が69%と最も高く、他の学年ではそれぞれ約4割程度の回収率に止まった。年齢別では18歳が7%、19歳が28%と、未成年者も35%含まれていることがわかる(表2:表2 対象年齢とその割合)。性別は、男子学生が6割強を占めている(表3:表3 対象の性別)。回答者の生活環境では、寮で生活しているものが約半数であった(表4:表4 生活環境)。このうち約8割弱が全寮制となっている1年生である。残りの約2割は部活動の所有する

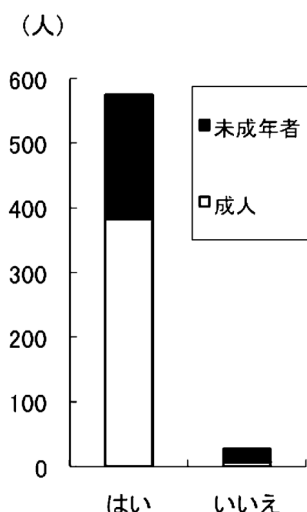


図1 成人、未成年別飲酒経験

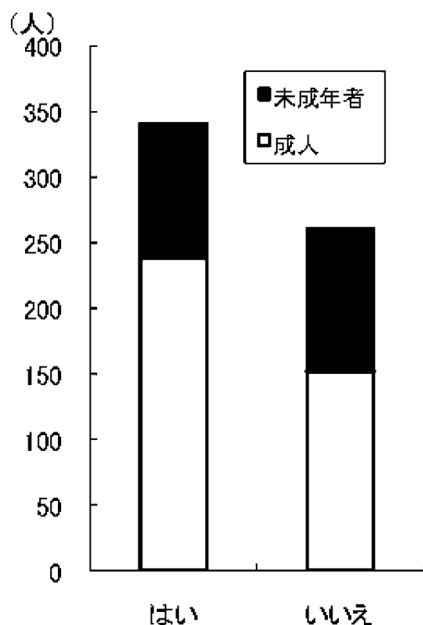


図2 飲酒強要の有無

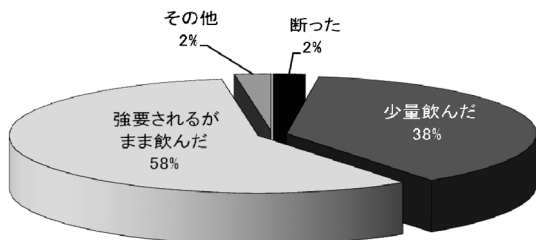


図3 飲酒を強要された際の飲酒行動

寮に属している者だと思われる。その他は、学生同士で「ルームシェア」をしている者が該当した。

4-2 飲酒状況

以下の表5は「Q7. あなたはアルコール飲料(ex. 日本酒, ビール, ウィスキー, 焼酎など)を飲んだ事がありますか?」についての回答を表にしたもので、回答者の飲酒経験の有無を示している。また、表6は同質問に対する未成年者の回答を表にしたものである。図1は表5, 6の結果を基に、回答者全体のうち未成年者がどれほどの割合を占めているかを図にしたものである。

4-1で述べたように、回答者の35%は未成年者である。しかし、飲酒経験のあるものは全体の95%を占めた。これらの飲酒経験があるものを対象に用意した質問が以下に示すQ8(あなたは定期的にアルコール飲料を飲んでますか?)とQ9(次のうちからその頻度を選んでください)である。

表7(定期的飲酒の有無)からは定期的に飲酒するものが全体の3割を超えることが読み取れる。表8(定期的飲酒の頻度)はその飲酒頻度を問うたものであるが、定期的に飲酒をする学生202人のうち114名、6割弱の学生が週に1回以上の頻度で飲酒をしていることになる。なぜ、これらの学生は定期的に飲酒するのだろうか。その回答が以下の表9: 表9 定期的飲酒の理由(Q10. あなたはなぜ定期的にアルコール飲料を飲むのですか?)である。

表9は定期的に飲酒をする学生を対象に複数回答

表5 全回答者の飲酒経験の有無

	はい	いいえ
人数	575	27
%	96%	4%

表6 回答者中未成年者の飲酒経験の有無

	はい	いいえ
人数	192	20
%	91%	9%

表7 定期的飲酒の有無

Q8. 「に対する回答あなたは定期的にアルコール飲料を飲んでいますか?」に対する回答. 定期的飲酒の頻度はQ9に示した如く, 毎日, 週2, 3回, 週1回, その他の何れか, 回答者が定期的と考える飲酒頻度を定期的とした.

	はい	いいえ
人数	202	373
%	34%	62%

表8 定期的飲酒の頻度

Q9. 「次のうちからその頻度を選んでください」に対する回答

	毎日	週2, 3回	週1回	月1回	その他
人数	5	40	69	77	11
%	2%	20%	34%	38%	5%

表9 定期的飲酒の理由

Q10. 「あなたはなぜ定期的にアルコール飲料を飲むのですか?(複数回答可)」に対する回答

理由	回答数	%
習慣になっていて特に理由はない	28	14%
アルコール飲料がないと眠れない	2	1%
嫌なことを忘れるため	16	8%
友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない	106	52%
アルコール飲料が好きだから	81	40%
その他	29	14%

可とした設問であった. 回答者数は202名, 回答数は366個. 回答者あたり1.8個の回答があった.

表10: 表10 飲酒による症状, 行動など(Q11. あなたは飲酒によって次のようなことを経験したことがありますか?)も表9同様, 複数回答可の設問であった. 該当なしが126名であり, 回答者数の合計は476名で回答数は1132個. 回答者あたり2.4個の回答があった.

表11(表11 アルコール耐性の自己認識度)では, 自身のアルコール耐性を問う質問であったが, 「十分わかっている」, 「ある程度わかっている」を選択した学生が84%と大多数を占めていた.

表10 飲酒による症状, 行動など

Q11. 「あなたは飲酒によって次のようなことを経験したことがありますか?(複数回答可)」に対する回答

	回答数	%
頭痛	331	58%
嘔吐	352	61%
一時的に記憶を失う	126	22%
二日酔いで学校に遅刻する	76	13%
二日酔いで学校を欠席する	64	11%
暴言を吐く	19	3%
暴力を振るう	11	2%

表11 アルコール耐性の自己認識度

Q12. 「あなたは自分がどの程度アルコール飲料に耐性があるかわかりますか?」に対する回答

	回答者数	%
十分わかっている	126	22%
ある程度わかっている	359	62%
どちらともいえない	50	9%
どちらかというところわからない	27	5%
全くわからない	13	2%

4-3 飲酒の強要

セクシャルハラスメントが叫ばれるのと時を同じくして, アルコールハラスメント(通称アルハラ)という言葉が耳にするようになった. アルハラとは, アルコール飲料に絡む嫌がらせ全般を指す言葉で, アルコール類の多量摂取の強要など対人関係の問題や, 酩酊状態に陥った者が行う各種迷惑行為などの社会的なトラブルを含む. 日本では, アルコールハラスメントが原因での死亡者がでたことをきっかけとして1980年代以降に急速に問題視されはじめた²⁾.

その中でも, 大学生によるサークルや部活動での「新入生歓迎会」や「打ち上げ」等で飲酒を強要され, 死亡者が出る事例も多数報告されている. 本学でも飲酒の強要はみられるのだろうか. 以下に飲酒の強要に関する設問の回答をまとめた.

表12(飲酒被強要の有無)から, 飲酒を強要されたことのある学生は回答者の半数以上を占めること

表12 飲酒被強要の有無

Q13. 「あなたは飲酒を強要されたこと(ex. コールなど)がありますか?」に対する回答

回答	回答者数	(未成年者)	%
はい	341	(103)	57%
いいえ	261	(109)	43%

表13 飲酒被強要に対する行動(対応)

Q14. 「飲酒を強要された結果, あなたはどうしましたか?」に対する回答

回答	回答者数	%
断った	7	2%
少量飲んだ	130	38%
強要されるがまま飲んだ	196	57%
その他	8	2%

表14 飲酒強要者の性別, 身分・関係

Q15. 「あなたに飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか?(複数回答可)」に対する回答

男性	女性	計(回答数)	%
大学の先輩 258	大学の先輩 113	371	54%
大学の後輩 39	大学の後輩 27	66	10%
大学の友人 119	大学の友人 47	166	24%
大学の指導教員 1	大学の指導教員 0	1	0%
アルバイト先の先輩 11	アルバイト先の先輩 4	15	2%
アルバイト先の友人 6	アルバイト先の友人 3	9	1%
アルバイト先の上司 5	アルバイト先の上司 1	6	1%
家族・親類		2	1%
その他		26	8%

表15 飲酒強要の有無

Q16. 「あなたは飲酒を強要したことがありますか?」に対する回答

回答	回答者数	(未成年者)	%
はい	133	25	22%
いいえ	469	187	78%

表16 飲酒を強要した際の相手の態度・行動

Q17. 「あなたが飲酒を強要した結果, その相手はどうしましたか?」に対する回答

回答	回答者数	%
断った	3	2%
少量飲んだ	54	41%
強要されるがまま飲んだ	72	54%
その他	4	3%

表17 飲酒強要対象者の性別, 身分・関係

Q18. 「あなたが飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか?(複数回答可)」に対する回答

男性	女性	計(回答数)	%
大学の先輩 43	大学の先輩 34	77	29%
大学の後輩 74	大学の後輩 45	119	45%
大学の友人 70	大学の友人 42	112	42%
大学の指導教員 1	大学の指導教員 0	1	0%
アルバイト先の先輩 2	アルバイト先の先輩 1	3	1%
アルバイト先の友人 9	アルバイト先の友人 1	10	4%
アルバイト先の上司 1	アルバイト先の上司 0	1	0%
家族・親類		1	1%
その他		7	5%

が読み取れる。また, 未成年者においても約半数が飲酒の強要をされていることがわかった。強要された結果の行動は表13(飲酒被強要に対する行動(対応))であり, その他の意見としては「場合によって断ったり飲んだりする」「嫌でなかったので飲んだ」などがみられた。自分に強要してきた相手が誰であったかは表14(飲酒強要者の性別, 身分・関係)に示した。その他の意見では「地元の友人」「高校時代の友人」などがみられたが, その中でも注目し

たいのは「教育実習先の先生」というものであった。

逆に, 表15(表15 飲酒強要の有無)は飲酒を強要したことがあるかという質問の回答をまとめた。強要したことがある学生は2割程度であった。また, 強要した結果相手がとった行動については表16(飲酒を強要した際の相手の態度・行動), 自分が強要したときの相手については表17(飲酒強要対象者の性別, 身分・関係)に示した。その他の意見で多かったのは, 自分に強要してきた相手の場合と

同様に「地元の友人」や「高校時代の友人」などであった。

5. 考 察

以下に結果5-1から5-3に対する考察を加える。

5-1 対象者背景

表1から表4は回答者の基本情報である。着目すべき点は、回答者の35%が未成年者であること(表2)で、男性の割合が女性と比べ高くなっている(表3)が、これは本学学生の男子の割合である66%とほぼ同等である。

5-2 飲酒状況

表5, 6からは回答者の飲酒経験が読み取れるが、全体だけでなく未成年者の回答だけをみても、飲酒経験者が9割を越えていることがわかる。これは、大学生になれば未成年者であっても飲酒を許されるものだという間違った認識が広く蔓延しているからだと考えられる。本学でも部活動の新入生歓迎会や打ち上げ時にアルコール飲料を飲む機会があり、成年、未成年に関係なく飲酒をする風潮がみられる。実際、回答者の中には、「健康大学なのに酒を強要するなんていかれてるんじゃないかと1年の時の新歓で感じた」との意見もあった。定期的に飲酒をしている本学学生は34%(表7)であり、北海道大学の45%と比べると少ない。

表9において、「友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない」を選ぶ者が多いということは予想通りであった。更に、先行研究で「その他」の理由として多かった「アルコール飲料が好きだから」という項目を追加したところ、「友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない」に次いで多かった。

少数ではあるが「アルコール飲料がないと眠れない」を選択する学生がいることは見逃せない。なぜなら、アルコール依存症の定義として睡眠障害は精神神経症状のうちの軽度の離脱症状と診断されるからである。また、その他の意見としては「飲み会があるから」という意見がほとんどであった。

そこで、定期あるいは不定期の飲酒により大学生が受ける影響についての質問を設けた。その結果が

表10である。選択肢のうち、「頭痛」、「嘔吐」、「一時的に記憶を失う」は飲酒が回答者の身体に及ぼす影響である。「二日酔いで学校に遅刻する」、「二日酔いで学校を欠席する」では飲酒が学生生活に与える影響であり、本学の調査では遅刻・欠席の経験者が24%であった。他大学の調査と比較すると、北海道大学の32%に比べれば少ないが、中日本自動車短期大学の7.2%³⁾⁴⁾と比べれば圧倒的に多い。「暴言を吐く」、「暴力を振るう」は、程度の差こそあれ他者になんらかの害を及ぼすという、飲酒による深刻な影響を受けている状態と考えられる。「頭痛」と「嘔吐」に関しては、回答者の半数以上が経験済みである。「一時的に記憶を失う」状態を経験したことのある回答者も「頭痛」、「嘔吐」に次いで多く、飲酒により回答者の身体に影響を及ぼすケースがほとんどであると推測できる。これは、自身にとっての適量を知らないためではないかと考え、自身のアルコール耐性についての質問を設けた。表11(アルコール耐性の自己認識度)がその結果である。

「十分わかっている」、「ある程度わかっている」を選択した学生が84%と大多数を占めていたことは、本学の授業「栄養生化学実験実習」内でアルコールパッチテストで計測した経験があるという学生が多数いるからだと思われる。しかし、中には「アルコールパッチテストは信頼性に欠ける。反応が全くなかったが自分は親同様、弱い体質だ」との意見もあり、この数字が実際の学生のアルコール飲料への耐性とイコールであるとは考えにくい。アルコールパッチテストを用いた飲酒の実態に関する研究⁵⁾では、アルコールパッチテストの陰性陽性の度合いと自己判断の比較の一致は半数強程度との報告もある⁶⁾。自分では「わかっている」という認識であるからこそ安心してアルコール飲料を口にし、適量を超えてしまうこともあると推測できる。

5-3 飲酒の強要

飲酒の強要を受けたことのある学生は341人、57%と全回答者の半数以上を占めていた(表12)。未成年者であっても強要されたことのあるものが103人、未成年者の49%を占めるなど見逃せない事実と

なっている。参考にした北海道大学の調査では、強要されたことのある回答者は全体・未成年ともに約4割であり、飲酒を強要されたことのある学生の割合は本学の方が高かった。これは、本学のほとんどの学生は部活動に所属しており、飲酒の機会としての「飲み会」に出席することが多いからではないかと考えられる。表13は飲酒を強要された結果どうしたかの回答をまとめたものだが、少量であったり強要されるがままであったり、程度こそ異なるものの、95%の学生が飲酒の強要に従っている。断った学生はわずか2%しかいなかった。これには自分に飲酒を強要した相手が、先輩であったり指導教員や教育実習先の教員であったりと、立場が上の人であるから断れない、断りづらいという上下関係を内包した状況があるからではないかと考える。実際、表14や表17のどのカテゴリーで割合が高くなっているかを読み取ると、強要してきた相手では大学の先輩が54%、強要した相手では大学の後輩が45%と、先輩が後輩に飲酒を強要するという酒の場に持ち込まれた上下関係が如実に浮き上がってくる。

この飲酒の強要をめぐる大学生の「事故」としては、1995年、同志社大学グリーンテニスサークルでの新歓コンパで飲酒後恒例となっていた川への入水を強要され1人が溺死した⁶⁾ケースや、1999年、熊本大学医学部1年生が新歓コンパ恒例のバトルという「飲み比べ」の後、死亡した⁷⁾ケース、2002年、神戸大学の教官(当時)が実験の失敗を理由に飲酒を強要し、2名が急性アルコール中毒で入院したケース⁸⁾がよく知られている。本学では上記のような飲酒による「事故」は起こっていないものの、飲酒が引き金となってストレス性の過呼吸を起こすなどの事例はあり、潜在的な事故は少なくないと考えられる。

6. 小 括

順天堂大学スポーツ健康科学部全学生を対象として、無記名アンケート「飲酒に関する大学生の意識

調査」を用い、飲酒経験、飲酒強要・被強要などを調査した。回収713枚、回収率1年生69%、2年生35%、3年生40%、4年生38%であった。競技スポーツを日常的に行っている本学学生は、定期的に飲酒をする者は他大学での調査に比べて少ないものの、飲酒を「強要をされた」57%、「強要した」22%どちらにおいても他大学での調査(45%、14%)より高い値を示していた。これは、「酒の場」の多くがクラブ(運動)部活動の延長であり、運動系クラブにおける先輩後輩の上下関係構造において酒を強要する可能性が高いことを示唆している。

参 考 文 献

- 1) 眞崎陸子：北大生101人と飲酒：「飲酒に関する大学生の意識調査」。北海道大学大学院教育学研究院紀要，103: 113-126, 2007.
- 2) 外池良三：『世界の酒日本の酒ものしり辞典』東京堂出版，2005，初版，22ページ風間眞理，矢野秀典，糸井志津乃，林美奈子，内山千鶴子，會田玉美，藤谷哲，堤千鶴子：医療系大学生の生活実態調査(健康・医療教育)，目白大学健康科学研究 1, 167-175, 2008.
- 3) 水野敏明，大塚三雄，橋本真弓：大学生の飲酒に関する研究(4)：中日本自動車短期大学生について，中日本自動車短期大学論叢，33, 81-92, 2003.
- 4) 水野敏明，大塚三雄，橋本真弓：大学生の飲酒とストレスに関する調査研究：中日本自動車短期大学生について，中日本自動車短期大学論叢 28, 103-112, 1998.
- 5) 小出彌生：大学生における飲酒の実態に関する調査エタノールパッチテストの併用とその効用，岡山大学教育学部研究集録 92(1), 117-125, 1993.
- 6) 小佐井良太：飲酒にまつわる事故と責任(一)：ある訴訟事例を通して見た死別の悲しみと法，九大法学 88, 468-310, 2004.
- 7) 小佐井良太：飲酒にまつわる事故と責任(二)：ある訴訟事例を通して見た死別の悲しみと法，九大法学 93, 312-226, 2006.

(平成22年9月2日 受付)
(平成22年10月28日 受理)